土香る会

読書会感想文集　7

2017.9

【目次】

第 10 回読書会(2017.9.16)／『或る女（前編）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1

※ 土香る会が毎月開催している「読書会」に参加した方が寄せた感想文と報告を掲載しています。

第 10 回読書会のまとめ

参加者 8 名　　2017 年 9 月 16 日

課題図書が『或る女』ということもあってか、いつもより参加が増えました。
長編ですので、今回は前編だけにしたのも参加しやすかったでしょうか。話しの様子を４つのポイントにまとめてみました。

１．時代について

昔は家の存在が今よりもずっと強かったように思います。男性が二人目、三人目の妻をもらうことが特別ではないように思われていたし、逆に女性だって複数回結婚する例もあったようです。

「妾」という立場の女性が、家系を絶やさないという考えもあってか（それに便乗して、と言うべきか）普通に存在していました。「男妾」も若干ではあるが見られたと記憶しています。お妾さんの子どもと一緒に通学したことのある参加者がいて驚きました。目に付かないだけで、今でも実態としてはあるように思います。

「大正デモクラシーによって葉子のような女性が登場した」という感想に対しては、先駆けはもっと前からいたはずだという意見や、妻という立場だけで一生が終るという生き方が長く続いたと思うが、個人として活動した女性たちがいたから、今のように女性の生き方が変わってきたという指摘もありました。

２．武郎の執筆姿勢について

武郎は作品の中で、必ずしも正しいと思うことだけを書いているわけではありません。苦しんでいることや辛いと思ったことなどを小説の中に取り入れています。もっと言えば、悪いと思っていることも敢えて取り込んで書いている、そういう作家なのです。

武郎は真面目（ある意味、純粋）で、不器用な人でした。いい意味でもっと開き直れていたら、違った生き方が出来た、そして、最後にあんな形で死ぬことはなかったのではないでしょうか。でもそれでは「有島武郎」ではなくなってしまいます。いつまでも結論が出せず、もがいて生きた一生だったのでしょう。

３．登場人物について

作家が主人公に自分を仮託する（投影させる）というのは本当でしょうか？
ヒロインの葉子を悪く書いたのは、武郎が自分のことを悪い人間だと思っているからだという意見が出ました。誰にでもよい面とそうでない面があり、悪いばかりだと思ってしまうと自分を大事にする気持ち（セルフプライド、自尊心）はどうなってしまうでしょうか。
でも、武郎はどうも悪い面ばかり見ていたような気がします。

葉子というヒロインは性悪女だという意見に対して、当時にあっては世間に対して悪女でなければ闘えなかったと思う、とか、それは女性からの見方ではないかとの考えも出されました。美人で、奔放な女性に対しては男女で見方が変わるかもしれないと思った次第です。

武郎は何故ヒロインをこのような女性にしたのでしょう。悪いイメージを持った主人公は最後には破滅していく存在として書かれることが多く、武郎も悪いイメージの葉子に自身を仮託したと考えられるため、自分自身の破滅を経て新たな自分に転生したいと願う気持ちがあった、という意見がありました。武郎らしい託し方かもしれません。

悪女と言っても、お金と肉体が目当て、他人を貶め破滅させていくことが目的なのでしょうか。それは表向きの「悪女の看板」だとしたら、悪女の本音は何なのでしょう。面白かったというか、愉快だったのは、「いじいじしている男性を見ると、葉子ばかりか私だっていじめたくなる」という女性の本音（？）が聞けたことでした。

内田という人物（モデルは内村鑑三）を悪く書いているのは、武郎が全幅の信頼を置いていたわけではなかったからだと思う、という意見がありました。さらに、結婚することになった葉子が最後に内田を訪ねていく場面で、葉子を突き放すような言動をしていることに対しては、自分の掌中に収まってお気に入りのよい子であったが、急に結婚すると言われたために、自分の立場をなくしてしまった腹立ちや、違う男性に葉子を取られる嫉妬の故だという意見がありました。いずれにしてもモデルの内村が気の毒になります。

登場人物にはそれぞれモデルがいるのですが、当人とは随分違っています。モデルが実際と違っているのは、そっくりだと具合が悪いからでもあるでしょうが、それよりも、実は武郎のいくつもある分身としてそれぞれ投影されているからだと思えます。登場人物は男女とも武郎の一部だという意見です。ちなみに、「葉子は自分だ」と武郎は考えた、と言う意見もありました。これはどの作家にも言えることなのでしょうか。武郎独特のものでしょうか。

４．聖と俗（魂と肉体）について

武郎の小説を読むとき、多くの場合欠かせないのがこの問題です。武郎自身が深く悩んでいて、彼の生き方そのものを左右する、言わば大問題であったと思うのです。

武郎は純粋であったので、自分が結婚したり子供を作ったりしたことにも罪悪感があったようです。その意味では、クリスチャンとして純粋に神に近いと思うこともある、との意見がありました。欲望があるのが人間、ないのが神だという考え方でしょうが、基督教を信仰すれば神に近づかなければならないのでしょうか。あるいは、近づきたくなるのでしょうか。武郎に聞けないところがもどかしく思います。

ほとんどの人は、思ってみること（欲望を感じるとか、相手を自分のものにしたい、など）はあっても、普段は抑えつけて生きています。思うことだけでもあってはならないとなれば不自然だし、人間の性（さが）を認めて生きていくことは大事なことです。認めて

初めて、神に許しを乞うという行為が出てくるような気がします。武郎は人間の根源を書いていると思う、という意見には深く考えさせられました。

最後に、東京の浜田さんから感想文を頂いたことの報告です。大学時代に『或る女』と『或る女のグリンプス』を比較して卒論を書かれたそうで、今回頂いた文章は目から鱗が何枚も落ちる分析がされています。特に、２つの小説のつながり（変わりよう）を読み解くための書物として、エリス著『性の心理学的研究』（その中でも第１巻中にある「宗教における自慰的要素」）を武郎が読んだことを挙げて、武郎の心理変化に伴った記述の変化について書いていらっしゃいます。俯瞰的な分析は刮目に値するものと思います。文章をつけてありますので、是非お読み下さい。

（文責：井上剛）

第 10 回読書会　感想文　『或る女』(前編)

参加者：In.

有島武郎の小説を読むととても疲れる。すぐに眠くなってしまう。何故かと考えたら、ページに余白が少ないことに気づいた。しかしそれは私だけの事情かも知れない。武郎の自然情景や人物の描写は素晴らしい。このことは皆さんに納得して頂けると思う。読みながらその部分をピックアップしたが、ここでは触れない。今回も又、と言うか、またまたと言うべきか、読んで難しい小説だった。

男女平等を謳った大正デモクラシーによって葉子のような女性が登場したと言える。実際、男性に伍して能力があり、行動力も伴った女性は、大正に限らず昔からたくさんいたと思われる。そして、そういう葉子であるからこそ、自分が優位にいると思い込んでいる男性に我慢ならないのであり、出る杭を我先に、あるいは寄ってたかって打ちたがる同時代の女性に憤るのである。

言わば世間の常識に反してまで奔放な言動をしている葉子だが、そのことと、有無を言わさず引っ張って行く男性に自分を預けたい、自分を任せて安心したい、という気持ちとは矛盾しないと思う（多少、奔放すぎるきらいはあるが)。女性が男性に自分を預けて安心したいと思うことは、何もせずまるまる庇護してもらうことと同義ではない。社会でばりばり活動している女性でも安心するには他人が必要だ。そして自分を託することは、精神的な意味と肉体的な意味の両方の要素があり、それは人間である以上当然のことだと思われる。

他方で宗教のことを考えてみる。
宗教（この場合は基督教）を信仰している人に中にも、宗教を後ろ盾にして自分を過大評価させたがったり、謙虚を装ったりする人や、自分勝手を棚に上げて自分を省みず、他人にばかり人格的、道徳的に善き人間であることを求める人がいる。こういう人は「偽善者」と分類されるはずだが、女性を支配下に置こうとする男性も同じ精神構造だと、葉子は思っているのではないか。

宗教とは何か？信仰とは何か？
自分には良いところも悪いところもある。反省すべきは反省して、少しでもよい人間になろうとする。それはつまり自分に対して謙虚に向き合うということだ。そして極めて個人的な、つまり自分の問題なのである。自分に対して謙虚に向き合うために、宗教という手段を必要とする人もいれば、何の手段もいらない人もいる。他人から宗教を強制されていいはずがない。

宗教の中にいると、自分をよく見せたがる人が出てくる。宗教のおかげで自分は以前より良い人間になったと吹聴したり、教義の理解が他人より進み、実践に移していると得意気になる。つまり他人と比べたがる人だ。しかし、他人を意識して比べようとしたとたんに、偽善者の烙印を押されてしまう。宗教（または信仰）はあくまで個人的なことで、自分と謙虚に向き合うことについては死ぬまでその努力が続くはずだと思う。

余談だが、武郎が留学中の米国で、日露戦争のことでキリスト教信者に絶望感を抱いたのは、自分のことではなく他人のことや世間のことをあれこれ言い募る米国の信者への不信感から来るものであっただろう。偽善者が多いと感じたのではないか。

もう一つ宗教の問題で書かせないのが肉体と魂（肉欲と精神世界）をどう考えるかである。肉体を捨てて精神世界を追い求める人が出るのは当然で否定されるべきものではないが、同時にそれが絶対的によいと考えるのはその人の考え（個人の気持ち）であって、むしろ特殊な部類に入るのではなかろうか。圧倒的に多くの人は、肉体を捨てられないだろう。その証拠に、基督教でも仏教でも妻帯を許す宗派があるではないか（親鸞は、むしろそれが自然の姿だと言ったはず)。又、妻帯を許していない宗派でも、性的スキャンダルが時々新聞を賑わわせるのはもう一つの証拠である。

そして今一つ、不倫とか多情と言われることについて述べると、日本で一夫一婦制が始まったのは基督教が入ってその影響を受けたからだと言われている。現に世界を見れば、一夫多妻制も多いのだ。また日本でも昔は、側室がたくさんいたり、妾がいたりした（今でもそうか)。積極的に賛成はしないのはそういう社会に生れたからで、それも人の在り方だと思えないだろうか。そういう観点から見れば、葉子も結婚をしているわけでもなく（婚約はしていたが)、男性関係が多いのは今でもよくあることで、私から言わせていただければ、許容範囲だと思う。

《参考になると思われる部分の抜粋》

「自分は優位にいると思い込んでいる男に我慢がならない」

p. 13　葉子は正面に向き直ると共に、その男の眸の下で、悒鬱な険しい色を引きしめた口のあたりに漲らした。木部はそれを見て自分の態度を後悔すべき筈である。

p. 15　葉子の眼には凡ての人が、殊に男が底の底まで見すかせるようだった。・・・ある機会を絶頂に男性が突然女性を踏み躙るという事を直覚のように知っていた葉子は、どの男に対しても自分との関係の絶頂が何処にあるかを見抜いていて、そこに来かかると情容赦もなくその男を振捨ててしまった。

p. 18　一番葉子を失望させたのは同棲後始めて男というものの裏を返して見た事だった。葉子を確実に占領したという意識に裏書きされた木部は、今までおくびにも見せなかった女々しい弱点を露骨に現わし始めた。

p. 22　彼れは今でも自分を女とあなどっている。

「強い男（または、人）へのあこがれ」

p. 17　葉子は思いもかけず木部の火のような情熱に焼かれようとする自分を見出す事が屢々（しばしば）だった。

p. 42　なるなら何所かに大砲（おおづつ）のような大きな力の強い人がいて、その人が真剣に怒って、葉子のような人非人はこうしてやるぞと云って、私を押えつけて心臓でも頭でもくだけて飛んでしまう程折檻をしてくれたらと思うんですの。どの人もどの人もちゃんと自分を忘れないで、いい加減に怒ったり、いい加減に泣いたりしているんですからねえ。何んだってこう生温いんでしょう。

「葉子の気性、考え方」

p. 15　それを聞くと「そうで御座いますか」と無造作に云いながら、ヴァイオリンを窓の外に抛りなげて、そのまま学校を退学してしまったのも彼女である。

p. 18　心の底の恐ろしく物質的な葉子

p. 36　眼の前に異国情調の豊かな贅沢品を見ると、彼女の貪欲は甘いものを見た子供のようになって、前後も忘れて懐中にありったけの買物をしてしまった

p. 41　思いきり泣きたい時でも知らん顔をして笑って通していると、こんな私みたいな気まぐれ者になるんです。気まぐれでもしなければ生きて行けなくなるんです。

p. 52　振分髪の時分から、飽くまで意地の強い眼はしの利く性質を思うままに増長さして、ぐんぐんと世の中を傍目もふらず押通して二十五になった今

p. 53　葉子は心の奥底でひそかに芸者を羨みもした。日本で女が女らしく生きているのは芸者だけではないかとさえ思った。

p. 59　何所に行っても取りあいもせず、鼻であしらい、鼻であしらわれ慣れた葉子には、何か真味な力で打くだかれるなり、打くだくなりして見たかった。

p.61　男は良う御座んすのね我儘が通るんですもの。女の我儘は通すより仕方がないんですから本当に情なくなりますのね。

p.62　私は誰れにあやまっていただくのもいやですし、誰れにあやまるのもいやな性分なんですから、おじさんに許して頂こうとは頭（てん）からおもってなどいはしませんの。

p.74　葉子はふと心の眼を開いた。そしてその心はそれ以来峰から峰を飛んだ。十五の春には葉子はもう十も年上な立派な恋人を持っていた。葉子はその青年を思うさま翻弄した。・・・一度生血の味をしめた虎の子のような渇慾が葉子の心を打ちのめすようになったのはそれからの事である。

p.80　感受力の鋭敏なそして何等かの意味で自分の敵に廻さなければならない人に対して殊に注意深い葉子

p.102　立役は幕明きから舞台に出ているものではない。観客が待ちに待って、待ち草疲（くたぶ）ぶれそうになった時分に、しずしずと乗出して、舞台の空気を思うさま動かさねばならぬのだ。葉子の胸の中にはこんな狡猾（ずるがしこ）いいたずらな心も潜んでいたのだ。

p/105-6　小さい時からまわりの人達に憚られる程才はじけて、同じ年頃の女の子とはいつでも一調子違った行き方を、するでもなくしてこなければならなかった自分は、生れる前から運命にでものろわれているのだろうか。それかと云って葉子はなべての女の順々に通って行く道を通る事はどうしても出来なかった。・・・幾度ものそんな苦い経験が葉子を片意地な、少しも人を頼ろうとしない女にしてしまった。そして葉子は謂わば本能の向せるように向いてどんどん歩くより仕方がなかった。

p.109-10　女のチャームというものが、習慣的な絆から解き放されて、その力だけに働く事の出来る生活がそこ（米国）にはあるに違いない。才能と力量さえあれば女でも男の手を借りずに自分を周りの人に認めさす事の出来る生活がそこにはあるに違いない。

p.119　物心を覚えてから二十五の今日まで、張りつめ通した心の糸が、今こそ思い存分ゆるんだかと思われるその悲しい快さ。

p.132　放縦という事務長の心の蔵は今不用心に開かれている。あの無頓着そうな方のゆすりの蔭にすさまじいdesireの火が激しく燃えている筈である。葉子は禁断の木の実を始め

て喰いかいだ原人のような渇慾を我れにもなく煽りたてて・・・おまけに青年の肩に置いた葉子の手は・・・男性的な強い弾力を持つ筋肉の震えをまざまざと感ずるので・・・恐ろしい心を葉子に起させた。・・・眼の前に見る蠱惑に溺れて行こうとのみした。

p. 142　船にいる凡ての人の中で事務長が一番気になった。・・・サルンで子供達と戯れている時でも、葉子は自分のして見せる蠱惑的な姿態（しな）が何時でも　暗々裡に事務長の為めにされているのを意識しない訳には行かなかった。

p. 150　あらん限りの重荷を洗いざらい思いきりよく放げ捨ててしまって、身も心も何か大きな力に任し切るその快さ心安さは葉子をすっかり夢心地にした。

p. 160　自分はどうしても生まるべきでない時代に、生まるべきでない所に生まれて来たのだ。自分の生まるべき時代と所とはどこか別にある。・・・生きている中にそこを探し出したい。

p. 160-1　その頃の葉子は事毎に自分の境遇が気に喰わないでただいらいらしていた。その結果は唯思う儘を振舞って行くより仕方がなかった。自分はどんな物からも本当に訓練されてはいないんだ。そして自分にはどうにでも働く鋭い才能と、女の強味（弱味とも云わば云え）になるべき優れた肉体と激しい情緒とがあるのだ。そう葉子は知らず知らず自分を見ていた。・・・殊に時代の不思議な目覚めを経験した葉子に取っては恐ろしい敵は男だった。

p. 161　女を全く奴隷の境界に沈め果てた男は・・・女がじっとしている間は慇懃にして見せるが、女が少しでも自分で立上がろうとすると、打って変わって恐しい暴王になり上がるのだ。

p. 161　葉子の嘗めた凡ての経験は、男に束縛を受ける危険を思わせるものばかりだった。然し何んという自然の悪戯だろう。それと共に葉子は男というものなしには一刻も過されないものとなっていた。

p. 162　あの妖力ある女郎蜘蛛のように、生きていたい要求から毎日その美しい網を四つ手に張った。そしてそれに近づきもし得ないで罵り騒ぐ人達を、自分の生活とは関係のない木か石ででもあるように冷然と尻眼にかけた。

p. 163　母が死んでからは、葉子は全く孤独である事を深く感じた。・・・鳥が木から木に果実を探るように、人から人に歓楽を求めて歩いた・・・一体何処に自分の生活をじっと

見ていてくれる人があるのだろう。そう葉子はしみじみ思う事がないでもなかった。けれどもその結果はいつでも失敗だった。・・・葉子は思い余って又淫らな満足を求める為めに男の中に割って這入るのだった。

p. 164　この人に思う存分打ちのめされたら自分の命は始めて本当に燃え上がるのだ。こんな不思議な、葉子にはあり得ない慾望すらが少しも不思議でなく受入れられた。・・・葉子は恐ろしい崖の際から目茶苦茶に飛び込んでしまった。葉子の眼の前で今まで住んでいた世界ががらっと変わってしまった。・・・倉知を得たらばどんな事でもする。どんな屈辱でも蜜と思おう。倉知を自分独りに得さえすれば・・・。今まで知らなかった、捕虜の受くる蜜より甘い屈辱！

p. 184　生れて以来、葉子は生に固着した不安からこれ程まで綺麗に遠ざかり得るものとは思いも設けていなかった。

p. 207　私は一旦こうと決めたら何所までもそれで通すのが好き。それは生きてる人間ですもの、こっちの隅あっちの隅と小さな事を捕えてとがめだてを始めたら際限はありませんさ。・・・私みたいな気随な我儘者はそんな風にされたら窮屈で窮屈で死んでしまうでしょうよ。私がこんなになったのも、つまり、皆んなで寄ってたかって私を疑い抜いたからです。

p. 210　葉子は溺れた人が岸辺を望むように事務長を思い浮べた。男というものの女に与える力を今更らに強く感じた。

p. 212-3　葉子は何んと云う事なしに、木村を困らして見たい、いじめて見たいというような不思議な残酷な心を、木村に対して感ずるようになって行った。・・・そして葉子は木村を通して自分の過去の凡てに血の滴る復讐を敢えてしようとするのだった。

p. 213　葉子には過去の凡ての呪咀が木村の一身に集まっているようにも思いなされた。母の虐げ、五十川女史の術数、近親の圧迫、社会の環視、女に対する男の窺覦（きゆ）、女の苟合（こうごう）などという葉子の敵を木村の一身におっかぶせて、それに女の心が企み出す残虐な仕打ちのあらん限りを瀉（そそ）ぎかけようとするのであった。

p. 227　葉子は大抵の場合、弱いものの味方をして見るのが常だった。どんな時でも、強いものがその強味を振りかざして弱い者を圧迫するのを見ると、葉子はかっとなって、理が非でも弱いものを勝たしてやりたがった。

p. 228　「・・・こんな場合には尚更ら同じ神様から来る信仰と希望とを持って進んで行きたいものだと思いますよ。何事も神様は知っていられる・・・そこに私は撓（たゆ）まない希望をつないで行きます。」決心した所があるらしく力強い言葉でこう云った。何の希望！葉子は木村の事については、木村の所謂神様以上に木村の未来を知りぬいているのだ。木村の希望というのはやがて失望にそして絶望に終るだけのものだ。何の信仰！何の希望！

p. 229　葉子はふと同じ眼を自分に向けて見た。木村を勝手気儘にこづき廻す威力を備えた自分は又誰れに何者に勝手にされるのだろう。何所かで大きな手が情けもなく容赦もなく冷然と自分の運命を操っている。木村の希望が果敢（はか）なく断ち切れる前、自分の希望が逸早く断たれてしまわないとどうして保障する事が出来よう。木村は善人だ。自分は悪人だ。

p. 229　「私は生れるとから呪われた女なんですもの。神、本当は神様を信ずるより・・・信ずるより憎む方が似合っているんです。・・・神様は私みたいなものをどうなさるか、しっかり眼を明いて最後まで見ています。・・・あなたはそんな信仰はないと仰有るでしょうけれども・・・でも私にはこれが信仰です。立派な信仰ですもの」

「人（または、女）の本性」

p. 49　働きのない良人に連れ添って、十五年の間丸帯一つ買って貰えなかった叔母の訓練のない弱い性格が、こうさもしくなるのを憐れまないでもなかったが、物怯じしながら、それでいて、慾にかかると図々しい、人の隙ばかりつけねらう仕打ちを見ると、虫唾が走る程憎かった。

p. 50　親族会議では葉子を手におえない女だとして、他所に嫁入って行くのをいい事に、遺産の事には一切関係させない相談をした位は葉子は疾うに感付いていた。

p. 53　葉子は他人を笑いながら、そして自分をさげすみながら、真暗な大きな力に引きずられて、不思議な道に自覚なく迷い行って、仕舞には驀（まっしぐ）らに走り出した。誰れも葉子の行く道のしるべをする人もなく、他の正しい道を教えてくれる人もなかった。偶ま大きな声で呼び留める人があるかと思えば、裏表の見えすいたぺてんにかけて、昔のままの女であらせようとするものばかりだった。

p. 80　葉子の頭に描かれた夫人は我の強い、情の恣（ほしいま）まな、野心の深い割合に手練（タクト）の露骨な、良人を軽く見て稍もすると笠にかかりながら、それでいて良人から独立する事の到底出来ない、謂わば心の弱い強がり家ではないかしらんと云うのだっ

た。

p. 109　結婚と云うものが一人の女に取って、どれ程生活という実際問題と結び付き、女がどれ程その束縛の下に悩んでいるかを考えて見る事さえしようとはしないのだ。

「或る女」

参加者：Sa.

早月葉子（グリンプス＝田鶴子　モデル＝佐々城本支・豊寿の長女、国木田独歩の最初の妻）
倉地三吉（モ＝武井勘三郎、ヴィクトリア号事務長）
木部孤笻（モ＝国木田独歩）
古藤儀一（モ＝有島武郎）
木村貞一（モ＝森広　有島の同窓　2 級上）
岡
田川夫妻（モ＝鳩山和夫（政治家　一郎の父）夫妻、法学博士）

葉子とは？

類い稀な美貌と才能の持ち主　裕福な家庭の長女　医者で気弱な父と外交的・活動家の母　幼いころから人にチヤホヤされることに慣れている

使用人もあり、家庭に様々な人が出入りすることが多く、上から目線で物を言うことに慣れている（傲慢）　金遣いが荒い。みみっちい生活は出来ない（見栄っ張り）。

類い稀な美貌と才能を持ち、裕福な環境で我が儘放題に育ち、男は皆自分に靡く者と言う意識が強い娘。自分を認めない者は排除、または関りを断つ（ヴァイオリンの教授、内田 etc）

そんな自意識の高い女が恋をした。従軍記者として名をはせた木部。周りの反対を押し切って結婚、しかし、その男も 2 か月余りで鼻につき、半年を待たずに離婚（19～20 才）。

25 才、諸般の事情からやむなく再婚を承諾。一番の理由は「金目当て」自分や妹たちの生活ためであろう。

夫となる木村の元へ向かうべくアメリカへ旅立つ（25 才）。その船上で、倉地に出会う。

客船絵島丸事務長・倉地三吉、筋骨たくましい大男、口ひげ、濃い眉、日に焼けた（潮焼け？）黒い顔、塩がれた声、酒と葉巻の匂い etc。どれをとっても、今まで葉子の周りには居なかった男だ。その後ろ姿を見ているだけで、葉子は不安、圧迫感を感じ、神経がざわざわと騒ぎ立つ。しかし倉地は葉子を気にもかけない。葉子は彼を振り向かせるために、あらゆる手練手管を駆使するが、倉地は一顧だにしない。

美貌と才能に恵まれて我が儘に育った女。いつも男を意のままに操ってきた女が自分の意のままにならない男に出会った。二人は愛人関係となる。

ここまでなら葉子の恋心（と言えるかどうか？）も解らないではない。なんとなく葉子を許しても良いとは思う。けれど、この後が悪い。アメリカに着き、純情無垢とも言える

木村に対する態度はいただけない。倉地に捨てられた時の予備として木村を繋ぎとめようとする態度。騙して騙して身ぐるみ剥いでいく狡さ。すべて計算づくでやっている。
　性悪女としか言いようがない。

一つ不可解な点。
　古藤の立場と言うか、態度がよくわからない。木村の友人であり、木村から紹介されて早月家に出入りしているようだが、なぜ使用人のように葉子に唯々諾々としたがっているのか？
　もと書生だったのなら、このような行動にもなるのだろうが……そういう経歴もない。

　最後に、有島は葉子のような女性が好きだったのではないか？と…ふと思った。悪女は魅力的だ。

『或る女』と『或る女のグリンプス』について

参加者：Ha.

私が、「『或る女のグリンプス』と『或る女』に於ける有島の生き方」という大層な題名の卒論を書いた昭和４９年当時、有島武郎全集は全部で三種類出ていましたが、どれにも『或る女』前編のもとになっている『或る女のグリンプス』は載っていませんでした。
『或る女のグリンプス』を読もうとすれば、明治４４年から大正２年までの雑誌『白樺』を集めなくてはなりませんでした。
この、中々読めないという事が私の興味を引きました。
それが、ある雑誌で『或る女のグリンプス』の復刻版の広告を見つけ、二作品の比較をしてみたいと思ったのが、卒論のテーマに選んだ理由でした。

今回、梅田さんから、９月の読書会のテーマと重なっているので、「書いてみませんか」とお誘いを受けました。
ですが、４３年も前に書いた長い卒論を書きまとめるのは難しく、難渋いたしました。
興味の続く所まで、どうぞ、お付き合い下さい。

『或る女』は、佐々城信子という女性がモデルであり、彼女は国木田独歩と離婚後、有島の友である森広と婚約します。
有島が、信子に初めて会った時から『或る女のグリンプス』を経て『或る女』を書き上げるまでには、１８年という歳月の流れがあります。

有島が、作家生活に入ったのは比較的遅く、山田昭夫氏は『有島武郎』の中で「諸般の事情があったにせよ、長い回り道を余儀なくされたのは、まさにその性格のなせる業で、こういう作家においては、作家以前の事を伏せて作品論に入るのは妥当を欠く」というような事を述べています。
有島が主人公のモデルに初めて会ったのは、この作家以前の頃であったから、まさに『或る女』が内包する１８年は、この作家以前をも含んでいるのです。

作家有島武郎を考える時、キリスト教との関係はついて離れない問題です。小泉一郎氏は『有島武郎論』の中で「一つの抽象的思想を真におのれのものとする為には単なる知的好奇心だけでは足りない。それに生命を賭ける事によってのみ、人間は観念を肉体化しうる（省略）武郎の文学における西欧的なものは、彼が結局、背教者となったにせよ、キリスト教的な課題に生涯を賭けて取り組んだことから生まれたのではないか」と書いています。

『或る女』が内包する１８年とは、キリスト教に入信し、神によって自己の完成を得ようとして得られず、背教者となってから、キリスト教に代わる自己完成を求め続けた１８年でした。

【年表】

凡例

・この年表は『或る女のグリンプス』と『或る女』に関係のある事項だけを記したものである

・（下線部）は独歩関係の記事であり、それ以外が有島関係の記事である

・年齢の項は、全て有島の年齢を示す

明治２８年	１８９５年	１７歳	１１月１１日	独歩、信子と結婚
明治２９年	１８９６年	１８歳	４月１２日	信子、失踪
			２４日	独歩・信子離婚
明治３４年	１９０１年	２３歳	３月２４日	有島、札幌独立教会に入会
			夏	森と婚約中の佐々城信子に会う
			９月　５日	森の元へ行く信子を横浜に送る
明治３５年	１９０２年	２４歳	１０月～	独歩、『鎌倉夫人』を連載。この小説の中で、信子をこきおろし、信子は世間の非難を浴びる
明治３６年	１９０３年	２５歳	８月２５日	有島、アメリカ留学の途にのぼる
			９月１４日	森広と会い、彼の信子への愛を知り感動する
明治４０年	１９０７年	２９歳	４月１１日	帰国
			１２月　５日	母校、東北帝国大学農科大学（現北大）の英語講師を嘱託される
明治４１年	１９０８年	３０歳	６月２３日	独歩、死亡
			１０月	『欺かざるの記・前編』刊行
明治４２年	１９０９年	３１歳	１月	『欺かざるの記・後編』刊行　これによって又も信子は世間の非難を浴びる
			３月	神尾安子と結婚
明治４３年	１９１０年	３２歳	５月	札幌独立教会から脱会、信仰を捨てる
明治４４年	１９１１年	３３歳	１月	『或る女のグリンプス』を『白樺』に連載
大正　２年	１９１３年	３５歳	３月	『或る女のグリンプス』の連載終わる
大正　３年	１９１４年	３６歳	９月	妻、安子が肺結核にかかる
			１１月	安子の療養の為、帰京
大正　５年	１９１６年	３８歳	３月２８日	エリスの『性の心理学的研究』を読む

		８月　２日	妻、安子死亡
		１２月　４日	父、武死亡
大正　８年	１９１９年　４１歳	２月２５日	『或る女のグリンプス』の改作『或る女』前編を脱稿
		５月	『或る女』後編を脱稿

年表にもあるように、有島が初めて信子に会ったのは、札幌独立教会に入会した年でもありました。
この頃の有島の信仰生活は充実していました。
アメリカにいる森広の元に旅立つ信子を有島は横浜で見送りますが、信子はアメリカで下船せずに戻って来てしまいます。
そして、その後、アメリカに留学した有島は森広と再会して、彼の信仰者としての美しい覚悟を聞かされて、日記に「信子が彼の聖愛によりて救われる日の来たらん事を願う」と記しています。
この時の有島は同じ信仰を持つ森に深く同情していました。
又、独歩については、彼の死後、ひと月後に書かれた日記では「彼を得て世界人として立った最初の文学者を得た」と記しています。
しかし、作品として、この事件を取り扱った時には、すでに信仰を棄て、世界観に変動を来たしていた有島の同情は逆転して信子の方に注がれています。
神崎清氏は『名作とそのモデル』の中で「有島のするどいメスは日本の近代文学に〈人間〉を持ち込んだ自由人の独歩の中から、おそらく独歩自身も意識しなかった男のエゴイズムを深くえぐり出したのである」と記しています。
又、山田昭夫氏は「森から信子へ、独歩から信子への同情の転移過程に『或る女のグリンプス』成立の実質がある」と述べています。
信子の〈背徳〉を、多鶴子（或る女のグリンプス）葉子（或る女）の〈反逆〉にまで昇華させたところに、有島の理想ローファーをかいま見る事ができるのです。

有島は芸術に対して心からの憧憬を持ちながら、純芸術とキリスト教の間には、越える事の出来ない溝があると考えた為、その衝動を全力で抑制していたと告白していますが、有島が棄教したという事は、その枷が外れた事を意味します。
有島の作家としての生涯が、ほぼ札幌独立教会退会をもって始まる事は有島文芸の世界を理解する上に重要な意味を持っています。
教会を退会した翌年、有島は『或る女のグリンプス』を『白樺』に連載し始めます。

大正２年に連載が終わった後、妻の安子が結核にかかり、療養の為、帰京します。
大正５年８月に安子が、１２月に父の武が亡くなります。

有島を芸術に向かわせる枷になっていたのは、前述したキリスト教と、もう一つ家庭の事情がありました。
有島の父は、長男である武郎が芸術家として生きようとするのを快く思っておらず、そういう父の存在は親孝行の有島にとって大きな束縛でした。
又、妻の看病と子供の世話が有島を煩わせていました。
安子は遺稿集の中で「あなたを一番よく理解し、あなたに偉大なお仕事をおさせ申したいと願うのは私が世界中で一番だと思います。（省略）あなたはご自身の真実の生活に飛び入らずに遠慮していらっしゃるのです。（省略）親孝行の美しいあなたの御性質がそれを躊躇させているのです。私は、あなたのその御心を思う毎に泣きます。それから私の病気、是が又どんなにあなたのお通り路をお邪魔し、お煩わせしているかもよく知っています。（省略）私は、あなたの御成功を見ないで死ぬのが残念でございますけれども、必ず御成功遊ばす事と信じて居ります。凡ての事に打勝って御成功遊ばして下さい。あなたに対しての唯一のお願で御座います」と言っています。
安子の悲しい励ましと願いが、有島を動かしたのも確かな事です。
その後、有島は『或る女のグリンプス』の改作『或る女』前編を脱稿します。

『或る女のグリンプス』から『或る女』前編への８年間に起きた事は、妻安子と父武の死である事は述べましたが、忘れてならないのはエリスの『性の心理学的研究』を読んだ事です。
『性の心理学的研究』を小説に応用したいという思いが『或る女のグリンプス』を改作する動機の一つにもなっていると思われます。
『性の心理学的研究』が如何なるものかは、長くなるので割愛いたします。
青山孝行氏は『或る女』後編は「女の性心理の体系論としてのエリスの作品化」であるとまで語っています。

『或る女』前編と後編には、明らかに異質の要素が見られます。
それは、前編は『或る女のグリンプス』の改作であるというところに、おのずと規定されざるを得ない面があり、『或る女のグリンプス』というものが存在していなかったら、『或る女』前編の姿は、もっと変わったものになっていた筈です。

『或る女』前編は『或る女のグリンプス』の構想を変えない程度に後編との繋がりを不自然に感じさせないように、後編に近づけたものだと考えられます。
この【構想を変えない程度に、後編に近づくように変えられている部分】が『或る女のグリンプス』と『或る女』前編との違いになります。

『或る女のグリンプス』の執筆に取り掛かった明治４３年に『二つの道』『も一度「二つの

道」について』が書かれているので、『或る女のグリンプス』には、これらの思想が投影されていると考えられます。
有島は『或る女のグリンプス』の田鶴子にイプセンの『ヘッダ・ガブラー』のヘッダの生き方を試みさせようとしたと思われます。
また、『或る女のグリンプス』の後に書かれた『惜しみなく愛は奪ふ』に『或る女』の思想基盤を見る研究者も多くいます。

『或る女』は主人公だけでなく、実在の人物をモデルとして書かれています。
それぞれの名前をどのように考えたかを類推するのは面白いのですが、一つだけ述べると『或る女のグリンプス』と『或る女』とでは、女主人公の名前が田鶴子から葉子に変わっていて、山田昭夫氏はホイットマンの『草の葉』に因んだものであると指摘しています。

『或る女のグリンプス』と『或る女』前編とを比べた場合、２１章にわたるストーリーは、ほぼ同じですが、改稿後は、かなりの増補が目立っています。
どのような面が増補されたかを調べてみると、葉子の心理描写（性格）および境遇に関する文章が大幅に加筆され詳しくなっています。
又、全体的に硬い表現、難しい表現が、読者に分かりやすく書きかえられています。
『或る女』には、欧文脈の強い影響が見られ、近代日本文学史上、比類のない優れた作品であると同時に、文章史上においても重要な意味を持った作品でもあるのです。

『或る女のグリンプス』と『或る女』前編を並べて書き写し比較して見ると、様々な興味深い点があるのですが、長くなりますので、一点だけ〈一語〉の違いにおける内田像について述べたいと思います。

７章中の『或る女のグリンプス』の中の一文「かの木田との離婚問題が暴露したので」が、『或る女』前編では「それがあの木部との結婚問題が持上がると」と書き改められています。
「離」と「結」、一文字の違いですが、全く正反対の言葉です。
木田（或る女のグリンプス）木部（「或る女」前編）のモデルは国木田独歩であり、『或る女のグリンプス』で離婚問題に、『或る女』前編で結婚問題に怒り狂った内田のモデルは内村鑑三です。

内田は、熱烈真摯な基督教徒と説明されており、そのような内田が離婚を責めるのは自然な流れです。
ただ、この責め方が異様なのです。
笹淵友一氏は、有島特有の誇張的表現が犯した過ちと見ていますが、福田準之輔氏になる

と、それは有島の意図したところで基督教徒内田の矛盾を示す点だとしています。
そうすると、『或る女のグリンプス』から『或る女』前編への移り変わりは、笹淵氏の場合だと変質になり、福田氏の場合だと成長という事になります。
『或る女』前編では、内田は葉子の結婚問題に狂い怒ります。
エリスは『性の心理学的研究』第一巻の「宗教における自慰的要素」の中で、宗教感情と恋愛感情との密接な関係を述べていますが、『或る女』前編の内田の人間描写は、その影響が表れていると言われています。
笹淵氏は、葉子の結婚を「罪だぞ、恐ろしい罪だぞ」と、とがめだてする内田は痴愚に近いと述べています。

「離婚」から「結婚」への移行を調べていると、どうしてもキリスト教批判という事にぶつかってしまいます。
主人公葉子を取り巻く人達は、全てキリスト教徒であり、偽善者の姿で登場しています。
有島は、離教後も内村を尊敬していましたが、内村は自分自身を「背教者製造家」と自嘲する程、多くの弟子に背かれています。
小泉一郎氏は、「彼は弟子達の独立的な思惟に対して寛容であったとは言えず『小さき内村』たるに甘んじ得る者のみが彼の門に残った」と、述べています。
彼は、自分から離れた弟子達に対して「叛けよ、叛けよ、叛いて汝の頭を真理の巌に打っ突けよ。而して砕けて死せよ」と、痛罵を放っています。
有島は、『「リビングストン伝」の序』の中で、棄教した理由を４つ述べています。
この４つの理由を考えるのは、とても興味深い事なのですが、ここでは長くなるので割愛いたします。

前出の「年表」を眺めますと、札幌独立教会に入会し、モデルの信子との出会いがあり、神尾安子との結婚、札幌独立教会からの脱会、『或る女のグリンプス』を連載し、エリスの『性の心理学的研究』を知り、妻と父との死別、『或る女のグリンプス』の改作『或る女』前編を脱稿するまでの年月、有島の心は揺れ動いていました。
有島の棄教というものが、どのようなものだったかというのも難しく、キリスト教と別れても、いつかは又、一つの道に出会う芽を内包しているような別れであったのか、『或る女のグリンプス』と『或る女』前編の中に彼の思いの軌跡を私は感じるような気がします。

以上が私の原稿だったのですが、送信しました原稿を読まれた梅田さんから「『性の心理学的研究』第１巻の中の『宗教における自慰的要素』の内容のどういう所が『或る女』前編の内田の心理描写にどのように影響を与えているのかが『性の心理学的研究』を読んでいない読者には見えて来ない」と、ご指摘を頂きました。

長い文章にお付き合い頂きましたが、更にもう少し続けます。

エリスの『性の心理学的研究』の第１巻は３つの部分に分かれており、『宗教における自慰的要素』は３番目の『自慰の現象』の中に補遺として出てくる原文でわずか１６ページの文です。
私が『宗教における自慰的要素』を読んで一番に感じたのは、これを読んで、有島は救われただろうという事です。
私が、有島が救われたのではないかと思う箇所は、

「人間が神を喜ばそうとしている時に、悪魔は精液を放射する事によって、その彼を汚して悩ますという事は明らかである（省略）宗教的方面の人々には、性的情緒と宗教的情緒との間に特殊な関係が存在するという事を認めることを生来かなり嫌う人が多い。この考え方は理にかなっていない。というのは、宗教的情緒の強烈な力にかられた人が、そうした情緒を引き起こす事は、罪悪だからそれに責任を持てと主張する者もなければ、又それは責任の持たれるべき性質のものでもない」と、言っている部分です。

有島は、『或る女』前編のひと月後に発表した『「リビングストン伝」の序』の中で、

「その翌年の３月に私は妻を迎えた。（省略）３１歳になるまでの肉的関係では、童貞を守り通してきた。しかし、それは私が性的に潔白であったという証明にはならない。世の信仰を持っている人達は、この問題をどう解釈しているのか私は知らない。霊的生活に入りうると肉の要求を容易に退けうるものなのかもしれない。私は、自分が信仰を得たと思っていた時でも、実際は信仰を得ていなかったゆえでもあろう。常に常に肉の要求に打ち負けていたという事を告白せねばならぬ。」と、述べています。

安子と婚約期間中、有島は安子に対して純粋な霊的な思いで接する事が出来、本当の信仰に至りうるかもしれないと一縷の期待を抱きますが、結婚は全てを見事に破壊してしまいます。
有島は、「お預けをさせられた犬のように辛抱強く素直であったことを覚らねばならなかった。ポーロが〈もし出来るなら、人は結婚しない方が良い。しかし、結婚しないでは結婚した以上の堕落に陥るだろうから、そんな人は結婚するがよい〉と言った言葉は、私の癪に障る言葉だった。結婚生活に入ってから、私は、ますます神聖な教会へは出席する事が出来なくなった」と、告白しています。
こういう苦しみを抱いていた有島は『宗教における自慰的要素』を読んで救われたと思うのです。

有島は『性の心理学的研究』を読んだ後、日記に「『或る女のグリンプス』の改作に有用な諸点を得た」と記していますが、その影響が色濃くあらわれているのは、新たに書きおろした『或る女』後編においてです。
後編では、性における女性心理、ヒステリー等の医学知識を応用しようとするあまり、前編にはあった社会的背景が抜け落ちてしまっているという難点が指摘されています。

『或る女』前編は、葉子の心理描写が大幅に加筆されているとは言え、『或る女のグリンプス』の改作であるが故に、歴史的社会的背景が存在しています。
その社会的背景がキリスト教社会です。
内田像（内村鑑三）に代表されるキリスト教徒の表現の仕方に『宗教における自慰的要素』の影響が見られると言われています。
けれど、私がこう書いて擱筆できない思いが『或る女』後編の終わり方にあるのです。

葉子は小説の最後で、子宮底穿孔の苦しみに、のたうちまわります。
実際のモデル佐々城信子は、このような最期を迎えていません。

『或る女』後編の最終ページに、

「葉子はその時不思議な懐かしさを以って内田の生涯を思いやった。あの偏頗で頑固で意地張りな内田の心の奥の奥に小さく潜んでゐる澄み透った魂が始めて見えるやうな心持ちがした（省略）葉子は誰にともなく息気を引取る前に内田の来るのを祈った」と、あります。

内田とは、内村鑑三の事です。
有島は、『或る女』前編で否定した筈のキリスト教、痴愚に近いとまで思わせた内田（内村鑑三）の姿を描きながら偽善に満ちたキリスト教社会に反逆したヒロインに、最後に罰のような死を与えます。
有島は後年、「私はあの書物の中で、自覚に目覚めかけて、而かも自分にも方向が解らず、社会はその人を如何に扱うべきかを知らない時代に生れ出た一人の勝気な鋭敏な女性を描いた」と語っています。
有島にとっては、葉子は必ず最後は破滅させねばならなかったようです。

この小説の最後には、様々な解釈があります。

『或る女』の広告文で有島は「畏れる事なく魂にも邪にもぶつかって見よう。その底に何もなかったら、人生の可能は否定されなければならない」と書いています。
「その底にあるもの」とは「内田の澄み透った魂」なのでしょうか？
「内田の澄み透った魂」とは、キリスト教会ではなく、キリストそのものを意味するのでしょうか？
私は、そのように受け取れないものを感ずるのです。
有島は「古藤は自分である」と述べていますが、古藤であると同時に葉子でもあると思うのです。

『或る女』出版の翌年に刊行された『惜みなく愛は奪ふ』の中で有島は「本能的生活」を賛美しています。
けれど、『惜みなく愛は奪ふ』を書き上げた直後から急速に書けなくなってきます。
試行錯誤の果て、「人生の可能」をつかみきれなかった有島の姿が小説の中にあるような気がするのです。

有島読書ノート 14：
『或る女（前編）』と『或る女のグリンプス』

参加者：Um.

今から８年程前、移り住んで既に数年経過した喜茂別町の歴史を調べていた私は、このまちの源流である伊達市に関する史料の中で、「佐々城信子」と出会った。

この女性に関わる史実の概要については、ある雑誌に書いた拙文（『バイウェイ後志』6,7,8号）を読んでいただければうれしいが、伊達亘理の田村顕允を調べる過程で知り得た女性であり、有島武郎の『或る女』／『或る女のグリンプス』の主人公、早月葉子／早月田鶴子のモデルといわれた人である。
この佐々城信子の生き方に触発されて、私は、有島武郎の『或る女』を初めて読んだ。
私が有島武郎に関心を深めるようになったのは、このとき、佐々城信子に導かれてからのことであったと言ってもいい。

９月の読書会は、『或る女』（T8）の前編（後編は 10 月に）がテキストである。
これは、明治 44 年から大正２年にかけて『白樺』に連載した『或る女のグリンプス』を、大正８年に書き直して発表したものである。
この「有島ノート 14」では、佐々城信子の生き方にインスパイアされて武郎が創造した二人の主人公、早月田鶴子（或る女のグリンプス）と早月葉子（或る女）を軸に、この二作品を対照しながら読むことによって、武郎にとって文学とは何だったのか、自分なりに彼の想いを探ってみたい。

１．総体的な印象

『或る女のグリンプス』も『或る女（前編）』も、ストーリーの展開そのものはまったく同じである。前者は、ある意味で作品全体のスケッチ風描写であり、後者は人物の心理描写や情景描写が一層緻密になっていることからボリュームは大きく膨らんでいるものの、21 の章立てとそれぞれの内容は同じである。
その粗筋はさておき、主人公の早月田鶴子／葉子は、時代や社会に染まって生きている男たちとの様々な関わりを通じて、そのことによって「女」である自分の心の奥深い襞のさらにその裏側に分けいっていく物語である。

作者有島武郎は、佐々城信子の生き方に自分を重ね、自分が彼女ならどのように生きるであろうかと自問しつつ、その自答を田鶴子／葉子に託したのだろう。渡米留学の過程で宗

教に道を求めた自分と決別し、その後文学によって自分を見つめ直そうとした武郎が、その合わせ鏡の一つとしたのが、田鶴子／葉子であった。自分自身を物語の田鶴子／葉子に仮託して、時代状況の中でどのように生きるかを「実験」したのが、この作品だったのではないか。
これは、『カインの末裔』における広岡仁右衛門、『生まれ出づる悩み』における木本など、彼の作品に見られる主人公の設定に共通してみられる、彼の創作行為の根源ともいえる「仮託と暗示」の一例である。

この作品の標題「或る女」が意味するところも、深長なものがあるだろう。武郎がこの作品の中で自分自身を仮託し創造した人物は、固有名詞に生きた女性というよりは、この時代にあって極めて特異な個性を貫くことによってその実、潜在的には普遍的な本質を垣間見せていた一人の「或る」女性田鶴子／葉子に化身した「女」そのものであり、これが、この「実験における仮説」の暗喩であったように思えてならない。
社会において女性を隷属させる様々な形を男性登場人物に担わせ、それら異なる形を有する「男」との愛憎に満ちた闘いを実験し、「女」を隷属から解放する可能性を「女」自身の生き方の中に探ったのが、この作品だったのではないだろうか。
『惜しみなく愛は奪う』や『宣言一つ』の中で根源的な問題提起を行い、様々な異論や共感を巻き起こした「第四階級」論に根を据えた、「女」による「男」との闘い。
佐々城信子にとどまらず、おそらく、伊藤野枝や菅野スガなど同時代の女性の闘いに触発されたことが、この作品の大きな動機になっていると思われるが、しかし、自身が男であり第四階級にはなれないと深い諦念を抱えていた武郎が、たとえ「自分は葉子である」という仮託を創作の源にしていたとは言え、その実験は破綻することが宿命づけられているものだったことも、肝に命じていた筈である。自分が立論によってそのような陣を張ることは、ある意味で、女性に対する冒涜に等しいとさえ考えていたかもしれない。『惜しみなく愛は奪う』や『宣言一つ』の延長としては、それがもっとも誠実な自己抑制であろう。

しかし、武郎は、その実験を文学の中で試みようとした。『或る女のグリンプス』執筆の動機は、幸徳秋水事件を反芻しながら、おそらく佐々城信子を想起して、現実社会で敗北していく彼女達の存在の意味を、評論では偽善そのものでしかないと考えていた限界を、文学の中でこそ超えられるかもしれない、という可能性に賭けてみたのが、この作品だったような気がする。
ここには、武郎が文学に託した特別の意義が潜んでいる。
モデルによってインスパイアされた着想を表現の核に具現化するとき、そこには、モデルに憑依した自分自身、武郎自身が描かれた。そのことによって、自分とは決して重ならないはずのモデルを、著者である自分自身そのものとしてはじめて内在化できたのだろう。

『或る女のグリンプス』と『或る女（前編）』を読み比べながら、いくつかの相違点をもとに、もう少し具体的に考えてみたい。
とは言っても、断章を並べただけのまとまりのない中途半端な感想文に過ぎないけれど。

２．相違点その１：離婚問題と結婚問題

「・・・かの木田との<u>離婚問題</u>が暴露したので、内田は或日厭應なしに田鶴子を自分の家に呼びつけて、恋人の心変わりを責める嫉妬深い男の様に、火と涙とを眼から迸らせて、打ちも据え兼ねぬまでに怒り狂った。此の時ばかりは田鶴子も心から激昂させられた。・・（略）・・「基督に水をやったサマリヤの女の事も思ふから、此の上お前には何も云うまいが、・・他人の失望も・・神様の失望も些かとは考えて見るがいい、・・罪だぞ、恐ろしい罪だぞ」」（『或る女のグリンプス』７章）

「それがあの木部との<u>結婚問題</u>が持上がると、内田は否応なしにある日葉子を自分の家に呼びつけた。そして恋人の変心を詰り責める嫉妬深い男のように、火と涙とを眼から迸らせて、打ちすえかねぬまでに狂い怒った。その時ばかりは葉子も心から激昂させられた。・・（略）・・「基督に水をやったサマリヤの女の事も思ふから、此の上お前には何も云うまいが、・・他人の失望も・・神様の失望もちっとは考えて見るがいい、・・罪だぞ、恐ろしい罪だぞ」」（『或る女』７章）

この相違点（太字下線部）については、浜田和子さんの指摘にもあるように、これまでも、評者によってさまざまに論及されてきたようである。特に、H. エリス『性の心理学的研究』が武郎にどのような影響を与えたのかについての浜田さんによる分析は、とても興味深く、納得できる指摘でもあり、ナルホドと腑に落ちた。
その論点を参考にしながら、ここでは、少し異なる観点から読んでみる。

『或る女のグリンプス』においては、田鶴子の結婚に嫉妬した内田（※内村鑑三がモデルと言われている）が、結婚自体について非難する事はさすがに出来なかった鬱憤を、離婚をきっかけとして一気に結婚そのものを非難する中で爆発させたが、これは田鶴子に恋する男としての内田の本音をキリスト者としての偽善に包みこみ（しかし、包みきれなくて）、基督の名を動員してまで怒りをぶつけた身勝手さを描いたものだろうと、私は最初に読んだ。そして、『或る女』では、葉子の結婚自体を嫉妬に駆られて基督の名によって非難する男としての内田をそのまま直截に描き、キリスト者である前に男である、そんな人間としての内田の矛盾に満ちた姿を表現したものと受け止めた。
しかし、このような読み方については、自分でも納得できない、ある疑問があった。

武郎は棄教して以降も、人間としての内村鑑三や新渡戸稲造に対しては尊敬の念を持っていた筈なのに、このような描き方をする事に躊躇はなかったのだろうか。

この疑問については、土香る会会員の浜田さんの論述が答えを示してくれた。エリスの『性の心理学的研究』を読む前の武郎が『或る女のグリンプス』を書いた時点では、「離婚」というキリスト者が非難しやすい宗教的切り口を内田に用いさせることによって、深層に潜む性的な感情をその表層的受け止めに包み込むことが出来た。これは、わかりやすい表現である。
その一方で、武郎がエリスを読んだあとの『或る女』では、内田の男としての嫉妬とキリスト者としての結婚非難の矛盾に憤る葉子の心情を位置づける上で、エリスが『性の心理学的研究』の中で喝破した宗教的高揚と性的高揚の両立という観点を用いる事が出来たのだと思う。
いずれにしても武郎は、キリスト者内田の男としての矛盾を描く事において、新旧二つの作品で異なるロジックと用語を用いたが、その行き着く先は同じ場所であった。
それは、キリスト教が、性的高揚は宗教的高揚に反するものであるとして、人間の本能的あり方を認めまいとする狭隘な規範に立っていたことを批判する事であった。内田は、その象徴的な批判の対象とされたのである。
しかし、なぜ、敬愛していた内村をモデルとして登場させたのだろう。
この疑問について、私は次のように読んだ。

「葉子は私である」と同じように、「内田も私である」という事なのではないだろうか。
モデルとされた佐々城信子も内村鑑三も、武郎はその激しい生き方に魅力を感じていたが故に、その行く末に自分の生き方の模索を重ねて、仁右衛門がそうであったように、葉子についても内田についても破壊的破滅的存在として描くことによって、そこに仮託した武郎自身を破壊し、その先に新たな自分の転生を賭したのではないか。
武郎をこのように読む事は、『カインの末裔』の場合と同じである。

新旧二つの作品で、言葉は正反対の意味であっても、その意味する含意は同じものである。
キリスト者内田への批判は、棄教してもしなくても自らの裡に厳然と存在するキリスト者としての武郎自身に対する、呵責のない自己否定を意味しているのではないだろうか。

３．相違点その２：田川夫人の挑発に対する反撃の仕方

「・・夫人は田鶴子の気分には一向気が付かぬらしく振る回って、「事務長は貴女のお室に遊びに見えますか」と云った。かっと田鶴子の心は理不尽な焼きつく様な一種の嫉妬を感

じた。わざと落付いたironicalな調子で、「**はいお見えになります、夫れが何ぞ・・**」とありもせぬ事をしらじらと云った。」(『或る女のグリンプス』１２章)

「・・夫人は、葉子の気分には一向気付かぬらしく、–若しそうでなければ気付きながらわざと気付かぬらしく振る舞って、「事務長はあなたのお部屋にも遊びに見えますか」と突拍子もなくいきなり問いかけた。それを聞くと葉子の心は何と云う事なしに理不尽な怒りに捕えられた。得意な皮肉でも思い存分に浴びせかけてやろうかと思ったが、胸をさすり下してわざと落付いた調子で、「**いいえちっともお見えになりませんが・・**」と空々しく聞こえるように答えた。」(『或る女』１２章)

答え方は正反対の表現に見えるが、どちらも、田川夫人の挑発に対する田鶴子／葉子の反撃を籠めた表現である。その意味では、表面的な相違の背後に潜む共通の心情を表わしていると読む事が出来る。しかし、共通の心情と言っても、それ以上に、ニュアンスの違いが強く感じられる。
それは、直截に云えば、『或る女のグリンプス』では、田鶴子は田川夫人に対してあからさまな戦闘的態度を取っている一方、『或る女』では、葉子は田川夫人に対して敵意を押し隠しつつもそれと気付かせる様な慇懃な応戦的ニュアンスを伝えている。
この点に、武郎が託した田鶴子と葉子の違いが見えてくる。

この違いは、他の箇所にも現れてくるが、一見、田鶴子の方が葉子より直截的で戦闘的に見える。しかし、表面的にはそうであっても、裡に籠めたエネルギーは互いに遜色が無い。
『或る女のグリンプス』は、『或る女』の前編にあたる部分だけで作品としての完結性が意図されており、ある種の性急さが感じられる。つまり、スケッチとしての作品であることが見て取れる。これは、武郎が弟の壬生馬にあてた書簡に中で書いているように、表現の未熟さを自覚しながらもどうしても形にしておきたい動機があったが故であろうと思う。
一方『或る女』は、この箇所でこの先の見通しまで明示する必要がない、後編を前提としてじっくり描き上げていく手法に切り替えている。表現技術の向上、という面もあると思うが、それ以上に、長編小説としての全体の展開を意識した、場面ごとの抑制が見られる一例だと思う。

しかし、表現技術的にはそのようなことであったとしても、新旧作品それぞれに武郎の心的状況を反映している相違、という側面もありそうだ。
この観点については、もう少しじっくり考えてみたい。

４．相違点その３：倉地の嫉妬もしくは見守り

「其時、突然二人の前に事務長が現れた。一種の暗い鬱憤の色が明らかに其浅黒い顔に彩られて、其睫は痙攣的に震えていた。而していきなり岡の手を取って、「さ岡さん又散歩だ、散歩をしましょう」と云いながらひっ立てた。・・・(略)・・・田鶴子はかっとなった。・・(略)・・其瞬間インスピレーションのように頭を横った考えがあった。**事務長は岡に対して嫉妬を感じているのではないか**。事務長ともある人が岡のような白面の少年を自分から引き離そうとする其心・・・。」(『或る女のグリンプス』１４章)

「その瞬間にいきなり事務長が激しい勢いでそこに這入って来た。そして葉子には眼もくれずに激しく岡を引き立てるようにして散歩に連れ立ってしまった。・・(略)・・葉子はかっとなって思わず座から立ち上がった。・・(略)・・その時不意に一つの考えが葉子の頭をひらめき通った。「**事務長は何処かで自分たちを見守っていたに違いない**。」(『或る女』１４章)

『或る女のグリンプス』では、倉地の心理描写が、物語の展開としてはやや性急な感じもするが、自然でわかりやすい。スケッチとしても当を得ているように思う。
しかし、『或る女』では、そのような倉地の心象が曖昧に表現されているだけでなく、「見守っている」と受け止められたように書かれている。これも、前項で述べたように、この後の「後編」の展開を意識した上での、「ため」を意図した表現なのだろう。
しかし、それにしても、ニュアンスの大きく異なる「見守る」という言葉による表現がなされた事については、その意図するものがよくわからない。後編に繋がっていく伏線のような事なのかもしれない。葉子の感情の膨らみ、と言う感じもする。田鶴子と同様、葉子も一瞬、事務長の嫉妬と受け止めたかもしれないその余裕が引き起こした膨らみだったのだろうか。あるいは、倉地の懐の大きさへの期待と予感が綾なした妙だったのかもしれない。そうだとすれば、武郎の筆力に改めて感嘆してしまう。このような、一読して理解に困惑する表現があることは、その作品の魅力の一つだと思う。

５．相違点その４：倉地の愛に対する悲哀と憎悪

「而して心の中では、一寸躊って立ったままで見て居る倉地の手が、決心を以て自分の肩にかけられる時は、**自分は些かも抵抗の力のない単純な女性となるの外はないと云う事を、しみじみと感じて**、更にせき来る悲哀の涙をとどめ兼ねた。」(『或る女のグリンプス』１５章)

「倉地がその泣声に一寸躊って立ったまま見て居る間に、葉子は心の中で叫びに叫んだ。「殺すなら殺すがいい。殺されたっていい。殺されたって憎みつづけてやるからいい。**私**

は勝った。何と云っても勝った。こんなにも悲しいのを何故早く殺してはくれないのだ。この哀しみにいつまでも浸っていたい。早く死んでしまいたい。・・・」(『或る女』１５章)

『或る女』の中で、倉地に対する葉子の愛憎が、状況の流れに逆らうが如く唐突に、叫びとなって迸る。倉地によって意のままに征服される悔しさと、意のままにさせるところまで倉地を追いつめた征服感が、混乱の様相で一つになった高揚感。葉子がこの後、倉地に対してどのような位置を占めながら愛を深めていくのか、その矛盾に満ちたダイナミックな表現の中に、期待感と同時に暗い予感も暗示されている。
葉子のこの混沌は、自らを追いつめ破壊し尽くす可能性を含んだものである事を葉子自身が認め、それを拒みつつも招いていることを、葉子本人に語らせている。

このように、自分の全てを賭けてぶつかって愛し、破壊と破滅を予感させる愛を互いに求め合う葉子と倉地の姿は、武郎が見果てぬままに見続けていた夢なのではないか。
それは、読者である私自身にも、強い共感とともに伝わってくる。
この見果てぬ夢がどのように展開していくのか、それが、おそらく後編の中心テーマなのだろう。

自分を破壊する事への衝動を仮託したのが、葉子と倉地である。
このとき、武郎は、安子との短い結婚生活をどのように振り返っていたのだろう。
そして、この二人に仮託した武郎自身のありようは、この先どうなっていくのだろう。
ここでは、武郎は葉子の叫びの中で、自問している。
しかし、自答は未だ見えない。未だ見えないけれど、後編の中で自答に迫る用意をしているからこそ、『或る女のグリンプス』をこのように書き変えたのだと、思いたい。
後編で答えが見えてくるのか。
見えて来なかったら、葉子のこの叫びは、どのような刃となって彼女自身に歯向かってくるのか。
この視点が、後編を読むときの、私の視点になりそうな気がする。

６．相違点その５：そして、ふたりは

「事務長の眼は新聞紙の上にありながら、心は余所を辿って居るらしかった。「おやすみにならない？」と田鶴子は小さな声で云って見た。自分の声の大きいのも恐ろしい程にあたりはしんと静まっていた。「う」と返事はしたが事務長はそのままで居る。田鶴子も黙ってしまった。」(『或る女のグリンプス』２１章)

この下線部は、『或る女』にはない。

事務長の心の中の動揺が、ここで表現されている。
この先、田鶴子と倉地が進んでいく道に待って居る悲劇を予感させる、倉地の情況描写である。『或る女のグリンプス』が作品として閉じられるその先に想像される余韻、暗示が、この一行に凝縮されている。
しかし、それがどのような道なのか、この作品は、この先への見通しを閉じている。
『或る女』には、倉地のこのような暗示は描かれていない。いわば、屈託がない倉地の姿が、前編の幕を閉じているだけである。

二人のこの情景の先に待って居るのがどのような道なのか、次回に向けて『或る女』後編に読み進んでいきたい。

※このノートは、まとまりのないまま、次回『或る女（後編)』に続けたい。